

# 日本における 「生き物供養」「何でも供養」の連環的研究基盤の構築

相田 満

(国文学研究資料館研究部・総合研究大学院大学文化科学科)

「生き物供養」「何でも供養」とでもいふべき信仰遺物が日本には膨大に残されている。そして、その祈念遺物を造る営みと、供養は今も続けられている。供養碑に代表される、こうした祈念物を作り続ける日本人の心性は、世界でも珍しいといえるが、残念ながらそのことを知る人は必ずしも多くはない。筆者はそれらの供養の全容を把握し、意義づけるために、遺物データの写真・位置情報（含地図）、内容、トピック、参照情報を分かりやすく提供するデータベースサイトを構築している。

本研究は、もともと農獣水産医学や文化人類学的研究から進められてきたものであった。しかし、対象は膨大に有り、追跡しきれないほどの速度で今も拡がり続けている。そこに文学・歴史・書道研究の視点を広げることは、供養遺物の特徴と意義を掘り下げることとなり、そのことによって、書斎から地域まで、研究のフィールドを繋ぎ、振興をはかるユースケースを作り上げることにほかならない。そして、こうした供養観を持つ日本人の心性を広く世界に理解してもらうための重要アイテムを育て上げることをめざすのである。本論ではそのための展望と展開を紹介したい。

In order to build a research infrastructure that linked to for the study of  
"living creatures memorial service", "anything memorial service" in Japan  
AIDA, Mitsuru

(National Institute of Japanese Literature,  
SOKENDAI: The General University for Advanced Studies)

"Creature memorial service" the belief relics which should be even called "every memorial service" are left for Japan enormously. And the work to make the prayer relics and the memorial service are also continued, now. It can be said that the soul of the Japanese who keeps making a memorial service monument such represented prayer thing is uncommon to the world, but there aren't always a lot of people unfortunately who know the thing.

I'm building a picture of the data of relics and the data base site to which position information (gan map), the contents, a topic and reference information are offered clearly because I grasp all detail of those memorial services and attach the significance.

This research had been advanced from fishing, biomedicine, agriculture and a cultural anthropology-like study originally. To expand the angle of the literature, the history and the calligraphy research work into there will dig into the feature and the significance of the memorial service relics. This means that, from the study to the area, joining the field of research, none other than that make up the use cases to achieve promotion. And I aim to raise the important item for the world to understand Japanese soul with such memorial service view widely. I'd like to introduce a view for it and development by the main subject.

## 1. まえがき

生き物供養・何でも供養とも呼称すべき、人以外を供養する信仰遺物の遍在は、世界に類を見ない、日本人の心性を象徴するものといえる。命を奪った生き物に対し、その命による恵みに感謝するとともに、命を奪わざるを得なかったことを詫げる奉謝と贖罪、来世の安楽の念を込めた供養の営みは、その事例の膨大さと相俟って類例を見ない現象と言えらる。そのことはまた、生き物だけでなく、命を持たない物品にも及び、扇・松葉杖・人形・橋・道などなど、果ては日食などといっ

た自然現象に対してさえも供養の営みを行い、それを祈念するモニュメントを多数残してきた。

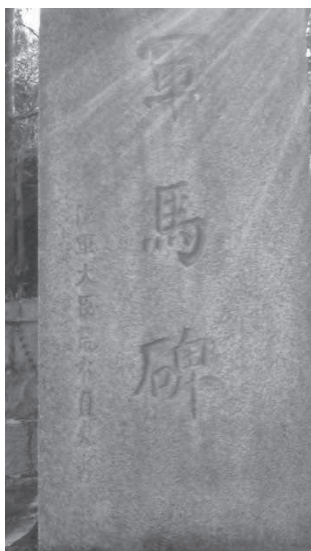
日本人が人間・神仏以外の鳥獣魚類等の生き物、眼鏡・針等の器物、果ては人魚等の架空生物迄も祀り、供養の碑塔を建立してきた営みに対し、外国人は一樣にびっくりする。自分たちの国にはこうした営み自体がないというのである。

特に、摂食される経済動物に対して供養碑を造り、祀る営みを捧げることには、その事例の多さがゆえに、これも日本文化の一樣態と意義づけることができるのだろうが、白蟻・金屑（試験用金属

片)・日食(図①)迄もがある事には,日本人でさえも驚く人は少なくない。



図① 日食供養碑(寛政11年己未[1799]11月)  
[「奥多摩水と緑のふれあい館」  
(東京都西多摩郡奥多摩町)蔵]



図② 軍馬の碑(神戸市長田区丸山地区)  
「軍馬碑/陸軍大臣荒木貞夫書」

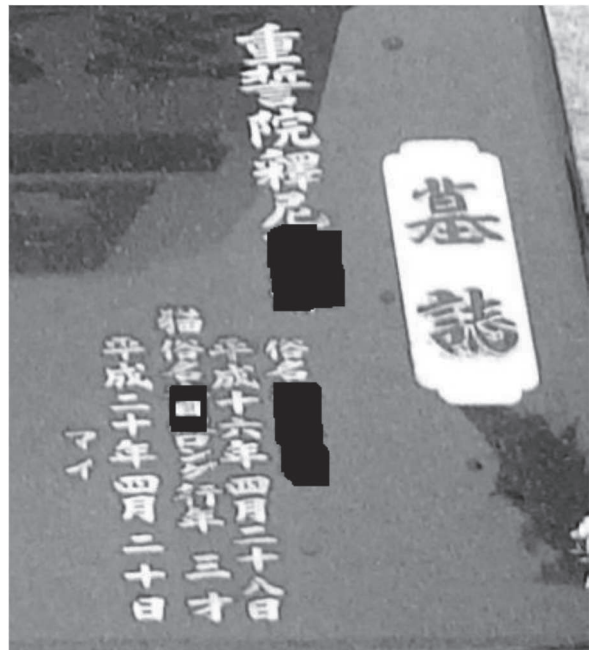
## 2. 消される供養と生まれる供養

この種の供養碑は今もなお生まれ続けている。その一方で軍馬・軍犬等の碑は戦時中の記憶を想起させるとの非難されたために,毀損・撤去されたものも少なくない。図②は私有地にあった

がために地主によって撤去・廃棄された軍馬碑の書影であるが(蔵中しのぶ氏資料提供 2011年5月[2011年8月撤去]),こうした事例は近年でも起こり続けており,保存状況・理解の度合いには地域差があるのが現状である。

その一方で,近年ではペット供養墓がその数を増やしている。生き物と人間を同域内に葬ることは,振袖火事の異名を持つ明暦3(1657)年1月18~19日の明暦大火がきっかけで,畜類と人間を同域内に葬ったとする回向院が有名である[1]。それ以外にも,犬猫専門霊園もその数を増やしており,日本最大の規模を持つ東京都府中市の慈恵院の付属施設として開園した多摩犬猫専門霊園は大正10年(1921)開園の,1世紀近い歴史を持つ。

さらに近年新設される霊園では,同墓域内にペット専用の墓地が供えられるだけでなく,同じ墓に埋葬されることが特徴とされている所も増えつつある。中には,墓誌にペットの名が人間と名を交えて記載されたりする所もあったり,ペットの戒名を扱う霊園も少なからずある。また,人間墓よりも見栄えのする墓が建てられるなど,供養文化の画期を目の当たりにするような場面も少なくない。



図③ 人と猫の名が並ぶ墓誌

こうした現象の根幹を辿っていくには,供養碑の実物調査と併せて,文学・歴史などの文献資料による跡付けの営みが必要となる。現在,それらの供養対象の全容を把握し,遺物データの写真・位置情報(含地図),内容,トピック,参照情報を分かりやすく統合したトピックマップデータベースによる総合サイトを構築するとともに,それを



猫や犬、牛・ワニなどのミイラがあり、生き物に対しても人間と同様に永遠の希求していた痕跡がある。このことを供養と同列に見なせそうではあるが、逆に来世で生前と同様の暮らしを求めするための犠牲としてミイラが作られたという見解も成り立つ。恐らくは後者であろう。いずれにしても、古代エジプトの文化・風習自体、今は伝わっていない。

生きている動物に対する愛護精神は西洋諸国の方が進んだ考え方を持っているようだが、死後の生き物に対して供養の営みを行っていることは聞かない。ただし、動物実験を扱う施設において同様の供養の営みもあるようだが、これにも日本の営みが少なからず影響しているようであるし、台湾で行われている屠殺場で犠牲になった獣魂を慰霊する営みも[3]、統治時代の日本の美風を継承した営みと言われていた。こうした生き物や何でも供養する営みのありようと、その数の多さは、日本を特徴付ける典型的文化の一例と言ってもよいのではなかろうか[4]。

実験や摂食等で命を奪った生き物への報謝や謝罪のための供養碑を建てる事が、日本特有の営みではないと言われて始めたのは、海外出張の多い農獣水産医学に携わる研究者からであった。「ヒトと動物の関係学会」「動物観研究会」等を擁する農学・生物系学会等で報告が行われ始め、近年は2冊の単著が上梓されている。例えば依田賢太郎『どうぶつのお墓をなぜつくるか—ペット埋葬の源流・動物塚』（社会評論社、2007）は長年の研究生活で出会った犬猫馬などの陸の動物供養墓の事例を中心にまとめ、田口理恵『魚のとむらい—供養碑から読み解く人と魚のものがたり』（東海大学出版会、2012）は漁協へのアンケートを基礎に、海棲生物類の供養碑を調べまとめたものである。他にも学会での個別報告や、旅行経験を綴るHPなどで事例はあるが、まとまった研究・著書は両氏以外にはまだなかった。

筆者は先述の田口理恵氏（2014年10月逝去）を分担者、依田賢太郎氏を協力者に仰ぎ、平22-26年度人間文化研究機構連携研究「生き物供養から見る自然観の変遷」（代表：相田満、10594千円）を進め、国内外の「生き物供養・供養碑」の実態調査と関連文献の調査・研究を行った。具体的には田口理恵氏が行った漁協へのアンケート調査による「生き物供養碑」の現地検証や新規供養碑の調査を重ね、データベースを育て上げてきた。

#### 4. データの概要

データベースは現在、以下の2バージョンで公開される（制作協力：内藤求氏〔株〕ナレッジシ

ナジー〕）。

【試行版】生き物供養碑 topic map2(2015.10版)  
<http://tmap1.topicmaps-space.jp/kuyo2/>  
 Id:aida01 Pwd:aida01!

【公開版】生き物供養碑 topic map(2014.5版)  
<http://tmap1.topicmaps-space.jp/kuyo/>

データベースはトピックマップ (Topic Maps) を用いて公開されており、1基1件の勘定で2,296件（公開版2,216件）の塚の情報と、GISと高度が記録された碑の写真1,236枚(1,056枚)を基礎とする参考情報と、104件（146件）の文献（HPサイトも含む）からの参考データを含む。（）内に前年公開のデータ数を示したが、参考データの数が減少しているのは、リンク切れURLや、入手不可能な不確かな文献情報を整理したためである。また、内容も大幅に更新されている。



図⑤ 検索結果表示画面（日食供養碑）

図⑤は検索結果表示画面（図①で示した日食供養塔の例）である。

試行版の採録地域は5カ国（ベルギー1、中国5、台湾11、アメリカ1）、日本国内22,7820件は48都道府県、市区町村は1916を立ててはいるが未採取の所を残す。

データには海外の事例が載せられているが、これらは何れも日本と関わりのある供養事例か日本とは異なる性質を持つ供養事例である。

まず、ベルギーのものは、「フランダースの犬」の物語の主人公ネロと忠犬パトラッシュが、クリスマスイブの夜に力尽きたアントワープの大聖堂内の前に少年と犬の友情を祈念するモニュメントが作られたものを採録したものである。そもそのきっかけは、2002年に同教会を訪れた平成天皇が「フランダースの犬」にちなむ教会とルーベンスの絵について訊ねられたことから、それを祈念して現地に工場を持つ縁から、日本のトヨタ財団がモニュメントを設置したものである。また、アメリカのものは、アラスカユーコン川でサケの解体工場を営んでいる「加島屋」の社長がサケの恵みを得ながらも殺生を営まざるを得ないことから、地藏堂を建てて供養を営んでいる事例を拾ったもので、これも日本との関わりは深いものである。

中国・台湾については事情が特殊である。そもそも、日本における「生き物供養」「何でも供養」は、日本の特徴を象徴するもののようなと言えそうだが、一部には、その祖型を中国に求めることが可能なものもある。その主なものには、次の四種を挙げることができる。

- |       |          |
|-------|----------|
| ①文字供養 | ②筆供養     |
| ③放生   | ④橋供養と道供養 |

これらの内、生き物供養に関連するものは③、何でも供養に該当するものには①②④が挙げられる。

「文字供養」は、前近代の台湾・中国では、一字でも文字の書かれた「字紙」は、そのまま捨てることはせず、惜字炉、敬字亭、焚字炉などとよばれる炉にくべて供養することが行われていたものである。以前はどこにでも見られたというが、今では著しく数を減らして、中国で十数基、台湾は趙志遠『台湾的敬字亭』によると109基、韓国では、かつてはあったが今はない。日本では沖縄で複数箇所、長崎・大阪でそれぞれ1箇所が確認できる。長崎・大阪のものは、華僑によって営まれたものが、その跡を残した物で、沖縄は1838年（天保9）に尚育王の冊封使林鴻年が「諭勸敬焚字紙」を書いて、文字を敬重し字紙を焼く炉の設置を勧諭して広められた（『球陽』巻之20・尚育王4年条）が、近郊の農村では捨てるべき反古紙自体も少なかったため、焚字炉は本来の設置目的から逸脱して、カラジ（毛髪）を捨てる施設だと言われたほどに普及は見なかった。ただし、字の書かれた紙を粗末にはしないという禁忌を教える『文昌帝君陰騭文』や『陰騭文』の教えは、江戸時代後期から明治初期まで根強い流布を見せている。字紙を大切に扱うことも、管見の限りで最古のものは、鑑真（388-763）によって伝えられた律宗（四分律宗）を開いた隋・初唐期の南山の沙門道宣（596-

667）の著述『教誡新学比丘行護律儀』上厠法第14（20条の内第8条）律宗（四分律宗）に、排便時に紙を使って汚すことを禁じる記載が見られることから、日本にもあったようではあるが、結局日本では定着しなかった[5]。

「筆供養」は唐の智永が始まりと伝えられる。日本でも多くの筆供養碑があり、その供養儀礼が営まれる所も少なくない。また、筆の材料となった動物を悼む儀礼としても挙行されている例（広島県安芸郡熊野町1827の榊山神社）もあることは、生命を慈しみ惜しむ点でいかにも日本的である。

また、放生は日本でも全国の八幡神社を中心に営まれており、中でも管崎八万宮の放生会は博多3大祭りの一つに数えられるほどの盛況ぶりである。

橋供養や道供養についても同様で、当初、本研究は生き物を中心に調査と考察を進めてきたことが、結果的にではあるが、何でも供養ともいべき、非生物供養碑も蓄積を進めてきた結果と関連性を持つことを示す典型例であることが分かっている。特に橋・筆のような中国淵源の供養は、日本では渡河中に落命した牛馬を、筆供養では材料の動物もともに供養するなど、生き物供養が色濃く現れている所も多いことが判明しているからである。

このことは、墓銘や願文などの関連資料と碑の位置関係からも裏付けられる。特に橋供養は物語類などの文学が伝える世界とは根底的に異なる実態があることが示される。また、京都の宇治橋断碑も人間だけにとどまらず、急流に命を落とした馬を供養することが碑文に記されていることから、生き物供養の視点で読み直すことができる。

宇治川の網代を取りやめ、浮島十三重塔に漁具を納め供養した鎌倉時代の叡尊の働きで発布された太政官符「宇治橋網代禁制」弘安7年2月27日[1284年3月15日]の理由にも用いられるなど、その影響は大きい[6]。

#### 4. データナビゲーションの有用性

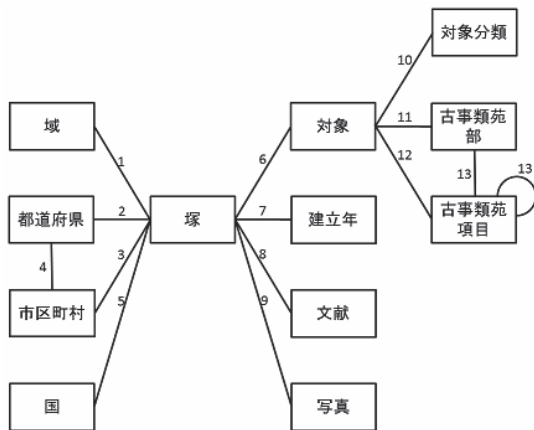
上述のことは、実地踏査とデータベースの構築作業のことから導き出された事柄の一例である。しかし、これらのことを総合的に分析・勘案するための材料がデータベースから浮かび上がるようにするナビゲーションを組み立てることが構想可能なユースケースをデータベースや公開サイトのインターフェイスに組み込まれることこそが、その有用性を問われる点といえよう。

対象物は公開版では水域 | 陸域の2域で211種に及んでいたが、塚・塔などの遺物形態の統合と異体字整理を行って178種まで減じたが、それ

でもまだ種類が多いので、試行版では新たに次の3種類に分けた整理を試みた。

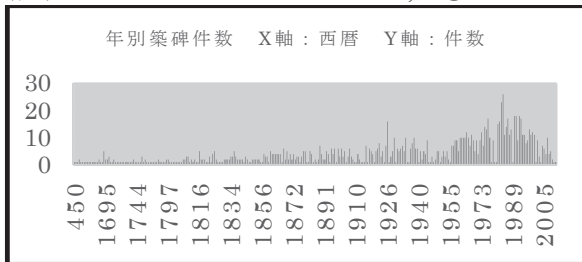
- ① 対象分類(分類数 16)：ヒト・人工物・伝承・動物・植物・魚類.....など、現代語の概念で理解可能な分類体系
- ② 古事類苑 (11部)：天・方技・文学・産業・服飾・器用・遊戯・動物・植物・地・神祇. 全 30 部の古事類苑による分類体系の 3 分 1 で、索引語彙でも 95%以上がまかなえる. たとえば、茶筌・釜などの供養碑は、古事類苑階層の「遊戯部>茶道具」から検索が可能になるが、「天然痘」のような編纂当時には存在しなかった語彙については、「疱瘡」のような語彙への置き換えが必要で整理が必要ではある。

古事類苑は引用書が群書類従の所収書名と深い関連がある.そのため、それをキーとして古典籍の世界に門戸を開く可能性を持つ. その一方で、今後、参考資料の原著・原典も掲載する予定であるため、参照用のインターフェイスの改良の工夫は不断に続けなくてはならないだろう. 特に、地図表示のアイコンのビジュアル化は、今後のインターフェイスの向上のための重要案件と考えており、準備を進めている。



図⑥ データベースの現状オントロジ図

現段階のデータベースのオントロジ図を示したものが図⑥である.これらのデータをもとに、現状判明している建立年のたどれるデータを元に、編年でグラフをとって見たものが、図⑦である。



図⑦ 建立年別データ

先に人間を同域内に葬ることは、回向院が濫觴であることを述べたが、生き物供養や何でも供養に該当する器物の供養自体は、それより前から存在したことが、このグラフからは分かるが、人間と同域に葬っているかどうかは、ここからは分からない。

上記グラフはペット霊園採録以前のものが反映されてはいるが、その一々を採録することには限界があることは確かであろう. 霊園の開設時期で以て代替するなど、表現やデータ解釈に課題を残しているといわざるをえない。

しかし、このようなユースケースをデータベースに組み込むことこそが、その有用性を高めるものとなるだろう。

#### 4. おわりに

鯨供養をはじめ、外国の人にこれらのことを話した際の反響はいつも驚きで受け止められる. ただし、話の前提として、その食生活文化への目配りも必要で、たとえばフグは、どのような形と特性を持つかなど、料理の美しさや味の紹介など、さらに間口を広げた紹介への目配りも必要になるだろう. 海外でも知られていないことだけに、留意すべき点は少なくない. LODはそうした負担の軽減に一役は買うだろうが、そのデータ・サイトの選定も今後の課題である。

本研究は JSPS 科研費 16H01760 の助成を受けたものです. 記して感謝申し上げます。

#### 参考文献

- 1)仁科邦男：伊勢や稲荷に犬の糞，第一章 1「伊勢屋稲荷…」はいつ生まれた言葉か，江戸初期の軍学者の証言「犬はほとんど見かけなかった」，草思社,pp24-28(2016).
- 2)細川諒一：逸脱の中世,第 4 章 虫類成仏と中世人の死生観—謡曲「胡蝶」と輪廻転生,ちくま学芸文庫,pp131-161 (2000).
- 3)片倉佳史：畜魂碑—家畜の例を祀る石碑を訪ねる(台北県淡水鎮),台湾に生きている「日本」,第一章 台湾に生きている「日本」を歩く,pp94-97, (2009), 祥伝社
- 4)相田満：生き物供養から見る自然観の諸相,アジアの人びとの自然観をたどる,勉誠出版,pp33-66(34), (2013)
- 5)相田満：文字供養に見る日本人の供養意識と彼我の温度差—文字を惜しむ—, 書論 42,書論研究会,pp203-216(2016)
- 6)相田満：中国由来の供養から見る日本人の供養観—橋供養を中心に—, 東洋研究 197, 大東文化大学東洋研究所, pp77-111(2015)